

Information & HIROBA

全国の地域組織（道府県本部・支部）ががんばっています 各地の「会報誌」や「作品集」を紹介します

会報誌 道府県本部や支部が、自分たちの活動をまとめ会員等へ定期的に配布しています。



奈良県 生駒支部

なんと月1回発行！様々な職種の会員さんによる「小さな親切」コラムが秀逸！



熊本県本部

全編カラーページ。写真もきれいですが、レイアウトがとても参考になります。編集の方の愛を感じます。

愛媛県本部

裏表1枚に情報が凝縮されていて見やすさ抜群！コスモス写真コンテストなどの独自の活動が目を引きます。



他県の会報誌（一部）

栃木県本部・山陰本部・三重県本部・北九州市本部・香川県本部・鹿児島県本部・千葉県松戸支部

作品集

コンクールを主催する道府県本部・支部が入賞者の作品（作文・エッセイ）をまとめ、発行。会員や学校等に配布しています。



長野県本部

入賞者の顔写真と表彰式の様子が紹介しています



埼玉県本部



福井県本部

標語コンクールのレベルも高い！



北九州市本部 (福岡県)



熊本県本部



鹿児島県本部

全ての作文に審査評を掲載。はがきキャンペーン・高校生の作文もあり内容充実！



鶴岡 「小さな親切」の会 (山形県)



米沢 「小さな親切」の会 (山形県)



富岡支部 (群馬県)



くるめ 「小さな親切」運動の会 (福岡県)

巻末に1年間の活動報告を掲載！

■青森県本部から クリーン大作戦スタート！

ゴールデンウィークに訪れる観光客を美しい青森で迎えたいと、4月22日(日)、県内各地でクリーン大作戦を実施。

今年初めて活動にスローガンをつけ、出発式では「ごみが落ちていたら進んで拾って青森県をきれいにしましょう」と、発案した小学生が宣誓。残念ながらその後雨が降り、市内は中止となってしまいました。県下の4支部は地域の清掃に取り組みました。

青森では、ゴールデンウィークが桜の見ごろです。ぜひ皆さんも訪れてみてはいかがでしょうか？

■米沢警察署と「小さな親切」を語る

米沢「小さな親切」の会(山形県)では毎年、「米沢警察署と『小さな親切』を語る会」を開催。親切心を育む運動の大切さを警察署のみなさんと話し合っています。

こうした交流を通じて、米沢警察署は定期的に地域の親切さんを実行章へ推薦する他、支部作製の運動のカレンダーを全交番に掲示するなど、運動へ積極的に協力してくださっているとのこと。全国でも珍しいこの取り組みは、今後の地域の安全と見守りにつながることでしよう。

■先生は子どもたちのお手本！

玉井小学校教諭(福島県大玉村)の植木忠佑さんは、福島駅のエスカレーターから落ち、動けなくなっている男性を、福島大学大学院の後藤柚香さんと共に助け、最寄駅まで送り届けました。この親切は評判となり、子どもたちの良いお手本として、同校で実行章贈

呈式が行われました。

大玉村では、平成27年に中央本部が工作教室を実施以来、佐藤吉郎教育長を中心に、運動を進めてくださっています。これからも「しんせつさん」がどんどん増えるといいですね！



贈呈しました。

迷子の小学生は土谷さんに出会い、どんなに安心したでしょう！その後、無事自宅に戻ったと聞き、土谷さんも安堵したということです。



■静岡県本部

祝！創立20周年記念誌が完成

静岡県本部は、平成9年に発足し20周年を迎えました。この度、20年の活動をまとめた記念誌が



完成。毎年、意欲的に新規の活動を展開している同県本部。改めてその活動の多様さに頭が下がる思いです！また、各年の活動の内

容と共に、社会のできごとや流行語、その年を象徴する漢字も掲載されており、勉強になる1冊になりました。

【お知らせ】

作品集『しんせつ日和』好評発売中

作文コンクールとはがきキャンペーンの入賞作品集「しんせつ日和」が発行されました。



【価格】400円（税込・送料別）
【割引】（10冊以上購入の場合）会員・組織の方：30%OFF / 一般（非会員）の方：15%OFF

【購入方法】中央本部ホームページ専用申込フォーム、もしくは中央本部へTEL・FAX・メールにて

■平和の大切さを絵本で

高田尚史長野支部事務局長の父で民話作家の高田充也さんが、新しい絵本「僕のお嫁さんになつてね」（ほおずき書）を出版。太平洋戦争中、長野県に疎開した国民学校の生徒と特攻隊員の実話に基づく物語で、戦争の悲惨さや平和の大切さについて訴えています。（H28年5月1日号で前作「だいだらぼっち」も紹介）



【寄附者ご芳名】
静岡県 碓井直次 / 和歌山県 阪口繁昭 / 岩手県 東 萬 / 広島県 松友会

（敬称略・平成28年12月末～平成29年3月末）

「おとなの作文」

奈良県 松井優馬（20歳）

去年の秋のことです。私たち家族は、一緒に暮らしている祖母を連れて、大分にある曾祖母の家に行きました。101歳で大往生を遂げた曾祖母の墓参りと、ある夫妻に会うためです。

若い夫妻が大分にやってきたのは二年前。農業をするために東京から大分に来て、家を探していたそうです。ちょうどそのころ、空き家だったのが曾祖母の家でした。夫妻と私たちにつながりができた瞬間でした。祖母

は最初、見ず知らずの人に家を貸すことためらっているようでした。しかし、両親の「これから知り合いになっていけばいい」という言葉に納得し、家を貸すことを許してくれました。

夫妻と直接会うのは初めてでした。曾祖母の家は山のど真ん中にあります。家の周りは木々に囲まれており、目の前には曾祖父が開拓した田畑が広がっていました。

まず出迎えてくれたのは元気に吠える犬。犬の鳴き声に気づいたのか、家の中から若い男女……件の夫妻が出てきました。耳のピアスや染めた髪などはまさに都会の若者そのもの。ただ、焼けた肌や農作業服を着た姿はと

ても馴染んでいました。

夫妻は喜んで私たちを家に入れてくださり、玄関ではよちよちと歩く夫妻の娘さんが出迎えてくれました。3歳になる娘さんは見知らぬ私たちにも物怖じせず、無邪気な笑顔を振りまいてくれました。奥さんは私たちを居間に案内すると、早速お菓子を振舞ってくれました。手作りのジャムやカップケーキなど、素材は自分たちで作った作物だそうです。

私たちが「おいしいなあ」と味わっていると、旦那さんが部屋の奥から箱を持ってきました。「これは片付けをしていたら出てきたんですけど……」

箱の中にはたくさんさんの写真が入っていました。祖母の若い頃の写真から、私たち家族の写真、曾祖母に宛てた私の中学時代の写真が写っている年賀状なども入っていました。「さすがにこれは捨ててはいけないと思って残しておいたんです。」

私たち家族は夫妻に強く感謝しました。夫妻は当たり前のことをしただけ、と言っていました。そのことがとてもうれしかったです。両親や祖母は写真をなつかしいなあ、と手に取り、その姿に夫妻もうれしそうでした。月に一度、夫妻から送られてくる野菜と、近況がつづられた手紙が楽しみになりました。